

## 日常生活史 — N女の場合

「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける  
労働者の日常生活」（その十四）

宝 福 則 子

### はじめに

本稿は『人文研究』第91・97・98・99・101・103・105・107・108・113・114・119・121輯に続く、「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」のインタビュー資料分析シリーズのひとつである。この資料の由来や分析方法については、第91輯を参照されたい。

今回利用した、当該資料は、1980年1月18日の10時から13時半まで、N女の自宅で行われたインタビュー内容を、A4タイプ用紙33ページに書き起こしたものである。ここで、参考のため、まず、N女の略歴と両親について簡単に記しておく。

N女：ローザ・ゲデケ *Rosa Gödeke*

1906年8月15日にパイネ *Peine* で誕生。

1913年ブラウンシュヴァイクへ移住。1921年から1922まで家政実科学校。

1922年から縫製女工、1929年に失業、未組織。

1936年1月18日に鋼版彫刻師 *Formstecher* と結婚。

父：1881年にゼーンデ *Sehnde* のドルゲン *Dolgen* で誕生。1962年にブラウンシュヴァイクで死亡。

職業は機械工。1899年から1912年までパイネの圧延工場で、1912年から1914年までアンメ・ギーゼッケ&コーネゲン社 *Amme, Giesecke &*

*Konegenn* で、1916年から1929年までと1931年以降はビュッシング社 *Büssing* で働いた。

1929年から1931年まで失業。

1929年から1931年までドイツ金属労働者連合組合員。

1912年までパイネの合唱団員。

1912年～13年 合唱団ブルンスヴィガ *Brunsviga* 会員。

1918年から社会民主党（：以降 **SPD**）員。

母：1878年にフェールム *Vöhrum* で誕生。1957年にブラウンシュヴァイクで死亡。1892年から1906年まで小間使い。1906年から主婦。未組織。3回出産し、内1回は死産。

## 1. 両親について

母の両親は、正式の結婚をしていました。母には兄弟姉妹がたくさんいて、祖父はフェールムの鉄道の踏切番でした。母は労働組合には入っていませんでした。政党にも入っていませんでした。婦人協会などにも、入ってはいませんでした。母は1957年の12月23日にブラウンシュヴァイクで亡くなりました。悲しいクリスマスでした。病院に入院して8日目に亡くなりました。彼女が亡くなる時に、私は彼女の側についていました。母の方が父よりも先に亡くなりました。母は父との結婚前に結婚していたことはありません。

## 2. 祖父母について

私は両親双方の祖母と、フェールムの母方の祖父のこともまだ覚えています。私が両親と日曜日にフェールムに行くと、祖父はいつも私の方にやって来て、まだ覚えています、「ああ、私のローズちゃん、やっと来たね」と言っていたのを覚えていますとも。当時、私は彼の唯一の孫だったのです。彼は髭をはやしていました。最近になって、彼の写真を手に入れたのですが、ウィ

ルヘルム皇帝のようです。彼はフェールムの鉄道で働いていました。プロイセンの国有鉄道でした。祖母は1931年にフェールムで亡くなりました。

父方の祖母は、もう1918年に亡くなっています。当時、彼女の息子たちはみな村から出て行っていました。でも祖母たちは二人とも80歳を生きのびました。

フェールムの祖母は81歳まで生きましたよ。ドルゲンの祖母もです。彼女は1918年にドルゲンで亡くなって、フェールムの祖母は1931年に亡くなったのです。私の両親がちょうど銀婚式を迎えた時に、彼女は亡くなりました。

私は父方の祖父のことは知りません。彼は、彼自身の農作業用の馬車に乗っていて事故死したということです。彼が亡くなったのは、1902年でしたが、その時、彼が何歳だったのかは知りません。母方の祖父についても、何歳で亡くなったのかはわかりません。たぶん、70歳くらいだったと思いますが、80歳くらいだったのかもしれない。

祖母は、ブラウンシュヴァイクには住んでいませんでしたが、みなブラウンシュヴァイク近郊に住んでいたのです。父方の祖父は農民でしたが、自営農民でした。自分の家がありましたし、ある程度の農地を持っていて、下男もいました。母方の祖父は鉄道で働いていて、踏切番でした。祖母たちは、主婦でした。父方の祖母は、農作業を手伝わなければなりません。もう一人の祖母は、どうだったのかは知りません。祖母たちは、昔は農家で仕事を手伝っていました。繁忙期はいつもそうでした。それが農村での臨時仕事だったのかどうかは知りません。いずれにせよ、農家の主婦はいつだって、一緒に農作業を手伝わなければならなかったのです。だから、父方の祖母の場合は、職業は主婦というよりは農婦とした方がよいでしょう。

### 3. 妹について

私には妹が一人いるだけです。兄も弟もいません。妹の名前はエリーゼ・シュツヒャルトです。私より3歳半下で、1910年2月27日にパイネで誕生し

ました。妹はまだ生きています。彼女は結婚しています。1938年の11月に結婚したのです。

彼女の職業は売り子で、結婚後も仕事をしていました。彼女は、昔のブラシ店エーラース *Bürsten-Ehlers* で見習いをしました。今はその場所にデパートのカールシュタット *Karstadt* が建っていますが、ちなみに、その前は革製品と香水のエーラース *Lederwaren und Parfümerie Ehlers* でした。妹は、その後、ハウスヴァルト *Hauswaldt* で、そして最後はフランク *Frank* で働きました。フランク氏はユダヤ人でした。

妹は、1924年に堅信礼を受けて、その後に職業教育の見習いに行ったのです。その後、さらに働き続けました。そして、ハノーファー *Hannover* に行つて、そこで結婚したのです。ハノーファーでも彼女は働き続けました。ブラウンシュヴァイクでは、1938年まで働いていました。エーラースで見習いをした後に、石鹼のハウスヴァルト、そして最後にフランクで働いたのです。ずっと売り子として働いていました。

妹の夫はきちんとした職業教育を受けた穀物仲買人です。彼はゲッティンゲン *Göttingen* 生まれの生粋のゲッティンゲン人です。妹は彼とここブラウンシュヴァイクで知り合いました。彼はブラウンシュヴァイクのある会社で働いていたのです。でも、どんな風にして結婚に至ったのかは知りません。彼の会社も当時はユダヤ人の会社でした。穀物仲買会社でした。穀物を扱っていたのです。妹の夫は旅行者としてブラウンシュヴァイクに来て、そのまま一時、ブラウンシュヴァイクに住んでいたのですが、その折りに知り合ったのです。妹夫婦は、どちらも離婚したこともなければ、私生児を生んだこともありません。私は、妹とは良い関係にありますが、彼女には子供がいません。

ところで、私は今となってはとても歳をとってしまいました。彼女はいつも誰かに何やかや命令します。昔、こんな事がありました。彼女たちはブル

クドルフ *Burgdorf* に住んでいました。ハノーファーからブルクドルフに引っ越して、一軒家を借りていたのです。彼女の家に行った時のことですが、「あなたの今やってる仕事を続けなさい。私が……食事を作る？」と私が言いました。その時、私たちは人参を料理しようとしていたのです。一緒にです。それで私は人参を切りました。しかも細くです。長く、そして細く切ったのです。そうしたら、彼女が2階から降りてきて、「何やってるの？」と言うので、「人参を切っているのよ！」と私は答えました。すると、「まあ、そんなに大きく切って！」彼女は、噛む必要がないくらいに小さく、みじん切りのタマネギ位の大きさにしてほしいかったです。それで私はその人参を少し短く切りました。そうしたら、彼女は又、下に降りて来ました。台所は階下にあったのです。そして「あんた、馬鹿じゃないの！」と言って、また2階に行き、そして外のテラスに坐りました。私も主婦です。私は上の部屋に行って、私の荷物をまとめて出てきました。私は駅へ歩いて行ったのですが、妹が自転車で追いかけてきて、「一体、どうしたっていうのよ？」と言うので、私は「ええ、ええ、なんで私が馬鹿だっていうのよ。あんたに好き放題を言わせないわよ」「私も主婦だし、家事ができないわけじゃあないわ」と言いましたよ。「一緒に戻ってよ。近所の人たちがどう思うのよ」と妹は言いました。彼女の夫が、これまでにこのことを知ったのかどうかは、わかりません。彼が手伝うと、たくさんのお皿を割ったりします。そして、洗ったり、拭いて乾かしたりするのが、遅いというのです。私自身がお皿を拭くにしても、そんなに早くはできませんよ。この義弟は、今、かなり重い病気にかかっています。昨夜、電話があって知ったのですが、彼は手術を受けたばかりなのに、もう一度、今度は膀胱の手術を受けなければなりません。そんな風に電話で話したり、私たちは、今は、また良い関係になっていますが、小さな事でもめめます。よその兄弟姉妹たちもそんなものなのですよ。この、いつも他の者に命令するなんていう彼女の性格がねえ、問題なのです。彼女はいつも「何か起こったら、私たちは一緒に暮らそうね」と言いますが、いや、いや、彼女はいつも私の後ろをついて回って何やかやと命令するにちがいません

よ。だから私は自分の住居に一人で住んで、彼女と一緒に暮らしません。彼女がハノーファーに住み続けずに、ブラウンシュヴァイクで暮らすのなら、時々、ブラウンシュヴァイクで会えば、それで十分です。一緒に暮らすのはゴメンです。絶対にゴメンですとも。一緒に暮らしたら、私たちの仲は悪くなるでしょう。こんなに長い間、別々に暮らしていたのですから、一緒に暮らすというのは、難しいのです。

#### 4. 労働者居住地域の様相

今の街の様子は、空襲の後に建てられた新しい建物などのせいで、昔の面影もなくなってしまいました。街を歩いていて、ときどき私は何処にいるのかわからなくなります。新しく建てられた建物のせいです。そして街の西側の地域 *Weststadt* などは、昔は住宅地としては、まったくなかった地域です。今は街中の4車線の道路などもできて、本当に変わりました。そんなものはまったくなかったのですよ。昔の街はととてもすてきでした。ザールブリュックナー通り *Saarbrückner Straße* はありませんでした。あの場所は、共同農地でした。ナチスによって作られたのです。家々は1934年か33年に建てられたものです。それに、1931年には、レーンドルフ *Lehndorf* とか、ここのマッシュローデ *Mascherode* などの新開地が開発されました。みんな子供の多い家族用にと考えられたものでした。ヒットラーが建設したのです。これらの地域は衛生面もよかったものです。

さて、私達が住んでいたライヒス通りですが、私たちはここの、大きな集合住宅に住みました。私たち家族の他にも多くの家族が住んでいました。この通りとキュッヘン通り *Küchenstraße* の角の、今はヴルブランド&ゼーレ *Wulbrandt & Seele* がある場所には、昔は工具店のペルシュマン *Perschmann* がありましたが、これは、その後、引っ越しました。昔の旧市街は本当にすばらしかったですよ。カイザー通り *Kaiserstraße* もそうですし、ニッケルンクルク *Nikelnkulk* も。これらの通りには古い家々がありました。南京虫

などがいっぱいいたものです。まあ、不潔にしている汚い人たちも住んでいました。それに加えて、少し上の階層の人々も住んでいました。ライヒス通りに、クレッペル通り *Kröppelstraße*。それにアルテ・ヴァーゲ *Alte Waage*、そしてランゲ通り *Langestraße*、ヴェーバー通り *Weberstraße*、ベッケンヴェルカー通り *Beckenwerkerstraße* などが旧市街にあったのです。この辺りの家々は、みんな古い建物で、牧歌的でした。ベッケンヴェルカー通りには労働者が住んでいました。労働者の住む通りでした。ランゲ通りも、ニッケルンクルクも労働者の居住区でしたし、とてごちゃごちゃしていました。「ニッケルンクルク、クリント *Klint*、ヴェルダー *Werder* の住人は、ドイツを墮落させる一番の困り者だ」なんていうお定まりの文句がありましたけど、当時、どんな風にこんな文句ができたのかは知りません。まあ、当時、こちら辺は皆、ごちゃごちゃと住んでいたとは言えます。でも、どっちみち、こんなのは単なる文句です。マウアーン通り *Mauernstraße* は、ニッケルンクルクのような通りでした。狭く細長い家々がごちゃごちゃと建っていました。だからといって、ライヒス通りがニッケルンクルクよりも品の良い通りだったというわけではありませんが、ライヒス通りは、家々の造りがこれらの他の通りの家よりもずっと堅牢でした。家の横幅もありました。旧市街の他の家々はとても細長く、幅の狭い家々だったのです。住人たちも雑多でした。

ホーエトア *Hohetor* では、お祭りがあって、馬の競争などもありました。このお祭りはベルフォート *Belfort*、そうですともホーエトアのベルフォート祭りとも呼ばれていました。そうですとも、あのマダーメン通り *Madamenweg* の角、ベルフォートです。

## 5. 学校生活

私は、ライヒス通り *Reichsstraße* の学校に通っていました。当時、私は1年生で算数が苦手でした。私と同じ机の隣には女の友だちが坐っていました。月曜日の午後はいつも学校がありました。まずは算数がありました。他の時

は書き取りでした。そして、ある時、問題がでました。そこで、まず $7+8=15$ の問題が出ました。それを書きました。他の問題もありましたが、まずこれを書いたのです。でも、この女友だちは16という答を書いたのです。それで私も16と書き直しました。ひとつも間違いをしなかった子供は、いつも木イチゴのキャンデーを、大きな木イチゴのキャンデーですよ、女の先生からもらえました。さて、先生が後ろの方からやって来て、隣の女友だちの答を線で消したのです。そこで私は、自分の16も消して、そこへ15と書いたのです。そうすると、先生はそれを見つけて、私の背中をげんこつで殴りました。彼女にはまるで背中にも目があったみたいです。そのことを私は黙っていることができませんでした。家に帰ってから、話しました。そうすると、父は校長の所に行って、そのことを話しました。それで、彼女はもう私をびしゃりとも殴ることはできなくなりました。私が6歳の時に起こったことです。これは私の行儀が悪いからということではなくて、ただちょっとお馬鹿な事をしたので、起こったことです。

やんちゃで乱暴な子というのはいつだっているものですが、後にウィルヘルム通り *Wilhelmstraße* の孤児院学校に通っていた時に、女の先生が泣きました。私は女の先生よりも男の先生の方が好きでした。男の先生の方がずっと上手に説明してくれたからです。6年目のクラスに行った時、私たちは分数計算をしたのですが、私の父は戦地にて、母も分数なんてわかりませんでした。それで私の成績は当然、「5（：一番悪い成績）」でした。その後、父が戻ってきて、おかげで私は理解できるようになったのです。それから、ある男の先生がいて、彼の説明は他の先生とは少し違っていて、その後は、もっと良く理解できたのです。だから、その後は分数がよくできるようになって、成績も良くなりました。学校では特に話すべき素晴らしい出来事も、悪い出来事もありませんでした。乱暴者の男の子は、当時もいました。ばかばかしいことをしたり、生意気なことをしたりする男の子もね。

## 6. 子供時代の労働と遊び

### 〈家事手伝い〉

私は6歳の時にブラウンシュヴァイクにやって来ました。1913年のことです。

私は子供の頃はお金を稼ぐための労働はしていません。母の家事仕事は手伝いました。皿を洗ったり、他の家事すべてです。日曜日の朝毎に、私と妹で、一人は靴磨きをしなければなりませんでした。他の一人はナイフとフォークを磨きました。これらは交替でやりました。昔は、みんなこんなものでした。他には、しなければならない仕事はありませんでした。買い物のお使いにも行きました。商店や消費組合で買い物をしたものです。でも、家事仕事は、主に母がしたのです。

しかし、まあ、今時の子供は何もしなくなりました。私の孫は今、18歳ですが、食事の後片付けの皿拭きさえもしません。とにかく怠け者なのです。私の娘は半日勤務の仕事をしています。私は、木曜日ごとに彼女の仕事場へ迎えに行き、彼女の家と一緒にコーヒーを飲み、サンドイッチを食べます。木曜日は、彼女が一週間分の掃除と洗濯をする日なのです。それで私は、彼女の手伝いをしたいので、「皿を洗うわ」と言うと、「いいわよ!」、あるいは「皿拭きをするわ」と言うと、「いいわよ、坐っていて!」と言われる。だまって坐っている人もいます。でも、何も手伝いもせずじっとしているのは私の性に合いません。私の孫は、そんな時、母親が皿洗いをしているのに、自分は何もせずに、それを見ているなんてことができます。洗った皿を拭くなんてこともしません。一般的にそうやってきているようですね。もう昔のように家族的ではなくなってしまったのです。子供たちはみんな自分の部屋を持っていて、もちろんステレオも持っているのですから。

### 〈遊び〉

遊ぶ時間は十分にありました。学校から帰ってくると着替えをしました。

当時、私たちは学校ではワンピースを着て前掛けをしていたものです。それを家では着替えたのです。そして外で遊びました。私たちは教会の中庭で、つまりアンドレアス教会 *Andreaskirche* で、いつもとても楽しく遊ぶことができたのです。たくさん遊びましたとも。時間がある限り、いろいろな遊びをしました。夕方には車道で陣取りをしました。日中も車道で遊んだのです。車道を通るのは馬車だけでしたから。本当に、あの頃は何でもすばらしかったと言えますよ。道路でも遊ぶことができたのですから。道路ではそんなに往来がありませんでした。自動車は通っていませんでした。

家の中でも遊びましたが、寒い時だけでした。家の中では妹と遊びました。一人くらいの友だちが加わる時もありました。人形の乳母車や人形の家で遊びました。でも部屋ではなくて、台所で遊びました。昔は、日中は部屋で過ごしませんでした。いつも台所でだけ過ごしました。でも、その後、私たちが学校を出てからは、部屋で過ごすようになりました。小さな子供の頃は、いつも台所で過ごしていたものです。だから、母もいつも台所にいました。私たちが何をしているか、母はいつも知っていました。友だちを家に連れてくることはできました。遊ぶ時間がなくてつらい思いをしたことはありませんでした。遊び相手は、同じ家に住む子供たちとか、学校の友だちなどでしたが。ブラウンシュヴァイクには親戚がいなかったのです。親戚の子どもとは遊びませんでした。親戚たちはパイネで暮らしていましたから。

私たちの子供の頃は、晩はみんなでテーブルを囲んで坐って、楽しく話したり、遊びをしていたものです。今では、テレビがそれに替わってしまいました。昔は、晩には家族が一緒に坐っていたものです。子供の時も、少し大きくなってからも、長いこと坐っていたものです。

両親の友人たちも家に来ました。彼らとも一緒にトランプで遊びました。楽しく話もしましたし、本当によかったものです。両親と話をする時は、子供の頃は政治のことなどは話しませんでした。大きくなってからは政治について話しました。子供の頃は、通りなどで起こった出来事などを話しま

した。何でも話しましたよ。

## 7. 親子関係

私は父とも母とも、両方ともに良い関係でした。両親といつも一緒に何でも話しましたし、一緒にいろいろなことをしました。

私の個人的な問題や悩みを両親と話したことはありません。ある時、私は窓ガラスを壊したことがあります。小石で壊したのです。玄関ドアの上の階には、商人が住んでいました。彼は出てきて、母の所に行きました。母は洗濯場にて、私はビュッシング社にいる父の元へ食事を届けに行かなければならなかったのです。両親はガラス代を支払わなければなりませんでした。その時には、父には殴られませんでした。父は何かあると籐製の杖で叩きました。

昔は消費組合の店で金券を集めていたものです。私も消費組合の店へお買いで買い物に行きましたが、子供だから、買い物袋をぐるぐるんと振り回すわけです。その中に、この金券が入っているのですよ。そこで私は消費組合の店に到着するのですが、もう金券が袋の中には入っていないのです。お金もなくなっていたものかどうかは、今となってはわかりませんが。いずれにしても、そんな時には、父がいつも籐製の杖で私のお尻をね、叩いたのです。それから、まだ魚屋でも同じ事がありました。ああ、そうですとも、魚を買うお金を、どういう風にしてかはわかりませんが、なくしてしまったのです。

父が私を叩くなどということは、そんなにしばしばあったわけではありません。その間の事情を聴かれるというくらいのことでした。母は、私を叩くなどというお仕置きはしませんでした。多分、母からは何度か、顔をしかめられたくらいのもので。でも、昔、私たちは、それほど生意気だったり、行儀が悪いなんてことはありませんでした。いずれにしても、ずっと親との関係がよかったので、体罰を受けることはありませんでした。暗い部屋に閉

じ込められるなどの罰を受けたこともありません。私が最後に両親から叩かれたのは、10歳の頃だったと思います。私は1921年に堅信札を受けていますから、多分1919年か1918年で、12歳の時でした。もう少し利口になっていなければならなかったのですが。

私の両親は、子供の前でお金の話をしたことは、まったくありませんでした。

## 8. 結婚

私が夫と知り合ったのは、選挙の前の日でした。ボール通り *Bohlweg* で知り合ったのです。私は何人かの女ともだちと散歩していたのです。まあ、そうして、そんな風にしていて、いい仲になったのですよ。ボール通りです。ボール通りは、当時、若い人たちが集まる場所でした。居酒屋などもありました。男の子と知り合いになりたいという意図をもってボール通りに行ったものです。その時、私は21歳でした。私たちは同じ協会に属していて、そこで知り合ったというわけではありません。そうではなくて、散歩に行って、そこで話をするようになって、その後に結婚を申し込むという風でした。私が27歳の時に結婚を申し込まれました。

夫と知り合う前、私には特定の男友達はいませんでした。だから、私が初めてキスを経験したのは、夫と知り合った最初の夜でした。それまで、私は近づきたい女の子だったので、キスなどしたことがなかったのです。そんなことをしてはいけないなどと両親に言われていたからというわけではありません。

## 9. 性・避妊・妊娠中絶

### <性>

私の両親は性的なことについての説明はしてくれませんでした。全然、何も教えてはくれませんでした。だから、私の子供が生まれた時、私は何も知らなかったのです。本当に何も知らなかったのです。私の両親は自分自身の経験なども話してはくれませんでした。

両親からは、性については何も教えられなかったもので、新聞を読みましたよ。AからZまで、すべてを新聞から学びました。朝には、まず私の新聞を読みます。新聞を読むことなしには、何も知ることができなかつたでしょう。すべてです。全てを新聞から学んだのです。政治的にも、新聞から多くのことを学びました。

### <避妊>

私は避妊具や避妊方法については、聞いたことは何度もあります。どこで避妊について聞いたかという、決して両親からではありません。友だち同士の仲間内でそういった話をしていました。結婚前にも聞いていました。女同士だけではなく、男の仲間も一緒にいました。18歳か19歳の頃だったと思います。私自身は、避妊はしませんでした。

### <妊娠中絶>

当時、中絶をした女の人たちがいたことは知っています。私の直接の知り合いには、中絶をした人はいませんでした。近隣に住む知り合いにも中絶をした人は知りません。たとえ、いたとしても、隠したことでしょうから。中絶をすると、罰せられましたが、当時、私には中絶について、特に反対も賛成意見もありませんでした。両親は中絶に反対だったろうと思いますが、今となってはわかりません。私の妹は、子供を生むことができませんでした。以前、彼女は手術を受けたのですが、子供はできませんでした。多分、彼女

にとっては子供がいた方が良かったのでしょうか。

## 10. 職業生活

私は、それまで働いていたシュミット兄弟社 *Geschwister Schmidt* が1929年に倒産したので、半年ほどの短い期間でしたが、失業手当をもらっていました。その後、パーペ&ミンテ社 *Pape & Minte* で働きはじめのですが、この会社で働いていた間は、(年金の掛金を支払った)年数には入っていません。パーペ&ミンテ社で働いていた間のことです。このことは、昨年だったか今年になって初めて誰かが知らせてくれたので、本当のことが判ったのです。ここの雇い主が、この間の(勤続年数を証明する)シールを年金手帳に貼ってくれていなかったのです。この間のシールが足りないのです。彼は私をクリスマスに解雇して、3月になると又雇うということを繰り返していました。毎年のことでした。1929年から36年まで、これを繰り返していたのです。私の父は、何度か雇い主に掛け合いに行って、何とかしてくれるように訴えたのですが、条件は変わりませんでした。雇い主は「ふん、ゲデケ氏は好きではない。ゲデケ嬢は雇ってもいいが、その代わり、彼女は冬には失業手当を受けに行かなければならない」といつも言っていました。この3ヶ月間は失業手当をもらっていました。そして3月になると、又、臨時雇いに声を掛けられるというわけです。そうですとも、この間は失業手当を受けていたのです。

1941年に仕事をやめたのですが、1943年から45年まで陸軍被服局で働きました。その後は、まず一度、仕事をやめました。そして又、1949年にこのライヒス通り *Reichsstraße* のヴァイエ社 *Weihe* で働きはじめて、1967年まで働いていました。経営者がフィッシャー *Fischer* のヴァイエ社です。

## 11. 宗教・政党・労働組合・帰属意識

### <宗教>

父はフリーメイソンとは関係ありませんでした。父は教会に属していませんでした。昔は、教会に属していないと、フリーメイソンだと言われたものですが、しかし彼の場合は、教会に属していなかっただけで、フリーメイソン協会に属してはいませんでした。

私は堅信礼を受けています。青年式ではなく、堅信礼です。1921年の4月か3月です。4月1日にはもう見習修行に出ていたのですから、3月だったのでしょうか。でも私は実科学校へ行きました。私の妹は1924年に堅信礼を受けています。青年式ではなくて、彼女も教会で堅信礼を受けたのです。私の母は教会に残っていましたから、母が教会で堅信礼を受けるようにしたのです。父はもう1918年に教会を脱退していましたが、「そんなことは許さない！」などとは言いませんでした。私はその後に教会から脱退しました。だから、私の娘は青年式に出ました。洗礼を受けて、その後に青年式に出たのです。堅信礼は受けていません。

### <政治>

両親とは、SPDのことや他の政治の話など、何でも話しました。頻繁に話しましたとも。両親の家では、ずっと昔は『フォルクスフロイント』‘*Volksfreund*’を購読していました。これが私たちの新聞でした。このほかに、当時は『ブラウンシュヴァイガー・プレッセ』‘*Braunschweiger Presse*’などがありました。私たちは、廃刊になるまでの間、『ブラウンシュヴァイガー・プレッセ』を何年間も読んでいました。両親は、『フォアヴェルトツ』‘*Vorwärts*’は購読していませんでした。

当時、ブラウンシュヴァイクで有名な人というと、メルゲス *Merges* でした。私が知っているかぎり、彼は自分のことすべてを犠牲にしました。このメルゲスのことを両親は本当に尊敬していました。しかし、後に、彼は共産

主義者とか、共産主義に染まったのです。でも、彼は、初めて、ここで、本当にあるべき状態になるように人々を導いたのです。

政治的には、編集者のティーレマン *Thielemann* を尊敬していました。彼と仲間たちは、その後、みな捕まってしまいました。ティーレマンですとも。彼のことは私たちもみな、好きでした。グローテヴォール *Grotewohl* のことも私たちはみな好きでした。彼は、後に東側に行き、そこで亡くなりました。当時、彼が東ベルリンに行ってしまったのには、びっくりさせられました。なんてこった、と思いましたとも。私自身は、グローテヴォールとティーレマンを尊敬していましたが、彼らのことは、本当に残念に思いました。両親はメルゲスを尊敬していましたが、私自身もやはり、彼のことを尊敬すべき人物に値すると思っています。彼もまた他の人たちのために全力を尽くしました。私たちは、両親も私も、これらの3人をみな個人的に知っていました。両親も私もです。

#### <帰属意識>

私が属していたのは、中間層か労働者階級です。どちらかというところ、中産階級というよりは、労働者階級です。当時は、本当に労働者階級に属していると思っていました。よくデモ行進がありましたが、いつも一緒に歩いたものです。メーデーの5月1日は、いつも長い大行列で行進したものです。労働組合や **SPD** や共産主義者が一緒にいました。昔の5月1日はすばらしかったものです。どこから出発したのだったか、まあ、どこかで集まって、街中を通って、その後でエルパーの森の家に行ったり、でなければシャーペン *Schäpen* へ行ったものです。そうこうしているうちにもう朝になっていました。共産主義者も一緒でした。まだ彼らはそんなに困ったことをしてはいませんでした。それは、5月1日のメーデーでした。つまり、いわゆる労働者デーだったのです。後に、廃止されましたが、にもかかわらず、ヒットラーの時代には、5月1日の催しに集まらなければなりません。もう、これは自由意思による参加ではありませんでした。参加しなければならなかつ

たのです。

私は、他の子供たちとは異なった扱いを受けたりして、自分が労働者の子供なので、差別を受けているのだなどと感じたことはありません。

## 12. 祝い事・余暇

### <祝い事>

私の家では、5月1日のメーデーはもちろん、誕生日も祝いました。合唱協会ではコンサートなどの催しがありましたし、昔は仮装舞踏会なども、いつもカーニバルの時期に行われていました。毎年、仮装舞踏会は行われました。私たちが、大きくなってから両親と一緒に仮装舞踏会に行きました。

クリスマスは、家族で祝いました。クリスマスイブには、私たちは台所に居させられました。その間、母が居間で支度をしていたのです。支度が終わると、窓が開きます。そしてベルが鳴ります。そこで私たちは居間に入って行くのですが、すると、母が「今、サンタさんが外に飛んでいったよ」と言うのですよ。まあ、そんな風にして私たちは家族だけで過ごしました。クリスマスツリーもありました。この木は、ハーゲンマルクト(市場) *Hagenmarkt* で買っていました。ハーゲンマルクトでは、いつも大きなクリスマスツリー用の売場が特別に用意されました。とにかく、私の子供時代でもっともすばらしかった祝い事は、クリスマスでした。その次が誕生日のお祝いでした。誕生日には女ともだちを家に招くことができました。

聖金曜日などは、全然、祝いませんでした。特別にそれを祝うなどということは、まったくありませんでした。昇天の祝日などには、そうですねえ、両親と一緒に郊外に行きました。森に行ったものですよ。あるいは体操協会が、つまり職人体操協会に父の友人がいて、この協会の催しで、エルム *Elm* にも行きました。リュックサックを背負って、このリュックサックの中にはポテトサラダなどいろいろな物が入っていて、北駅からの汽車の座席に坐り

ました。そうして午後まで過ごして、帰ってくるのでした。いつも日帰りの短い旅行でした。泊まりがけの旅行はしませんでした。待降節の時期は直接にはあまり重要ではありませんでした。それに、待降節の飾り環なんてものも知りませんでした。クリスマスだって、クリスマスツリーがあるものというくらいだったのですから。待降節の飾り環とかそのようなものすべては、後になって出てきたものです。いえいえ、当時は、まだそんなものは、知りませんでしたとも。

復活祭には、私たちがまだ子供だった頃は、外に出かけました。そして両親が復活祭の飾り卵を携えて行くのでした。そして、私たちはその卵探しをしたり、「ああっ、今、復活祭のウサギ（：子供たちに復活祭の卵を持ってくるという言い伝えがある）がそこにいたよ」などと言ったりして騒ぎ回ったものです。少し大きくなって少女になると、もうその習慣は変わってしまい、私たちは家ではなく、どちらかという、外に出かけていきました。誕生日の祝い以外は、もう子供の頃とは違っていました。

労働組合が催すパーティなどは、行ったことはありませんでした。母の日なども当時はまだありませんでした。母の日はヒットラーの時代にはじめてできたのです。

夏至や冬至の祝いはしませんでした。聞いたことはありましたが。私の家族も夏至や夏至の祝いはしませんでした。

大晦日は、付き合いのある家族同士で祝いました。いつも、あっちの家からこっちの家と行き来していたものです。そして大きくなってからは、私たちは外に出て行きました。家での大騒ぎをしたくなかったからです。私たちは庭園協会や他の何処かへ行ったのです。

#### <余暇>

母は、ブラウンシュヴァイクに来て、半年の間、泣いていたそうです。ホームシックのせいでした。ここブラウンシュヴァイクにはだれも親戚が住んで

いなかったのです。親戚がみなパイネで暮らしていたので、男の人たちが合唱協会に歌いに出かけると、女の人たちは家で親戚同士や隣人や友人たちとコーヒーを飲みながらのおしゃべりを楽しんだものなのです。それぞれの家で順繰りに集まっていたのです。それがここではできなくなったのですよ。でも、ここでもその間に知り合いができました。パイネ出身の人たちでした。そうするうちに、父が1924年にまたパイネの庄延工場で仕事を見つけました。すると、私たちはまたとパイネに引っ越さなければならぬかと思っただのですが、母がブラウンシュヴァイクから引っ越したがりませんでした。私も引っ越しはいやでした。私は、「私はここに残るわ」と言いました。パイネはとても小さな町でしたから。それで私たちは今ここにいるというわけです。結局、父はパイネで仕事はせずに、ここに残ったのです。それで、父は、ビュッシング社 *Büssing* で仕事を始めました。

私の両親がここで見つけた友人たちは、パイネ出身者であったり、父が **MIAG** 社で働いていた時の同僚でした。その他にも数年後にできたパイネ出身の友人とか、いろいろいました。夕方になると、こうしたパイネ出身の家族や同僚の家族と行き来して集まっていました。順番にそれぞれの家で集まっていたのです。

日曜日には、私たちは家族でビュルガーパーク（市民公園）*Bürgerpark* やヌスベルク *Nußberg*、エルパー *Ölper* の森の家などへ行きました。そこでコーヒーを飲んだりしました。昔は、ヌスベルクやエルパーの小さなレストランの『エルパー森の家』などでは、自分たちでコーヒーを淹れることができたのです。ヌスベルクや『エルパー森の家』などへは、天気良ければ、日曜日の午後になると、よく両親と一緒にコーヒーを飲みに行きましたが、夕食用のパンなども持って行ったのです。今時のように、もりもりとは食べませんでしたから、質素な夕食です。

両親はグループで行くこともありましたが、私たち家族だけを連れて行くこともありましたが、一緒に行ったのは、父の同僚たちでしたが、一人だけ違って、その一人というのは、ヴィクトリア保険 *Victoria Versicherung* の人

でした。その人の奥さんがパイネ出身だったので、知り合ったのです。他はみな父の同僚たちでした。男の人たちはスカート（：トランプ遊びの一種）をして遊びました。最初はそうではなかったのですが、後になって変わって、私たち子供たちも、そこで一緒にトランプを楽しむことができました。

私の両親が付き合っていたのは、父の同僚や故郷のパイネ出身者の人たちでした。母にとっては、どちらの人たちも大事でした。ブラウンシュヴァイクでは付き合っている親戚はいませんでした。私たちは、いつも祖母がまだ暮らしていたパイネやフェールムに行かなければなりませんでした。ドルゲンへは、その後、行かなくなりました。パイネ出身者というのは、親戚でもなく、父の同僚でもありませんでしたが、昔からの知り合いでした。父は、好んで彼らと付き合いしました。彼らは週に1回は会っていました。それぞれの家に交替で集まっていました。そして日曜日には私たちも一緒に出かけました。一人を連れて行くか、二人の時もありました。いつも家族がみな一緒に出かけるというわけではありませんでした。

父が居酒屋に出入りしていたのかどうかは知りませんが、金曜日毎に合唱協会に歌の練習に行っていました。ずっと前には、ここのベッカークリント *Bäckerklint* の居酒屋に出入りしていました。その居酒屋は、『シュヴァルツァー・アドラー』‘*Schwarzer Adler*’とかいう名前だったかもしれませんが、はっきりとはわかりません。それから後には、もう戦争後でしたが、つまり第一次世界大戦後ですが、彼らは『アトランティック』‘*Atlantik*’にも行っていました。この『アトランティック』は、ノイエ通り *Neue Straße* の、今はプファイファー&シュミット *Pfeiffer&Schmidt* のある場所にありました。『アトランティック』という名前でした。夜遅くまでいましたよ。この二つの居酒屋はだんだん大きくなりました。この合唱団は、混声合唱団でした。最初から混声合唱団だったと思います。

自由にできる時間があると、小さな菜園もあったので、父はそこで庭仕事

をしていました。夕方には新聞を読んでいました。夏にはその後で窓から外を見たりしていました。菜園はジークフリート通り *Siegfriedstraße* にありました。今はこの通りには大きな建物が建っています。この菜園は砂地でした。その後、返さなければなりませんでした。多分、もう 20 年代の初めに、建物を建てていたのでしょう。

私は大きくなってからは、夕方に散歩に出かけたりしましたが、何かの協会などには入っていませんでした。でも演劇協会のダンスなどには行きました。当時の『フライエ・ビューネ』‘*Freie Bühne*’などのダンスパーティです。いつもいろいろなスポーツ競技場で試合なども見ました。どこの競技場にも行きました。まだ覚えています、宮殿前広場の競技場、今は何という名前になっているのかわかりませんが、ここではいつも、大きな試合がありました。体操の試合なども行われました。たぶん、地域の選手権だったのでしょう。自由体操愛好家 *Freie Turner* などのたくさんの協会の長い行進がありました。棍棒を用いる体操もありました。とにかく何か催しがあると、何処へでも行ったものです。

私は、結婚前には夫と一緒に、しばしば、小さな、ダンスのできるレストランに行っていました。ジュート通り *Südstraße* のシルトベルゼ *Schildbörse* には、よく行きました。ここには結婚前によく行っていたのです。結婚前でした。結婚後は、私たちはもう出かけませんでした。結婚前は、ブリュニングス・ザールバウ *Brünnings-Saalbau* にもよく行ったものです。これもレストランでしたが、階下に映画館がありました。そして階上ではダンスなどができたのです。美しい、上品なレストランでした。シルトベルゼは小さかったのですが、アウグストア *Augusttor* のところのホテルにも行きました。これらのレストランなどのダンスホールに交互に行ったものです。